「地域」再生と物語体験 ～「もやい直し」の現場から

本木 洋子

熊本県水俣市は、二〇〇九年から「みなまた環境絵本大賞」事業を開始した。その年は水俣市制施行六〇周年、水俣市立図書館設立八〇周年にあたり、その記念事業として取り組んだものだ。日本の公害の原点である水俣病に苦しんだ町だから、その負の歴史と向き合ってきた町だからこそ、「環境」に取り組める事業だった。市から委嘱されてコーディネーターを引き受けのだが、翌年から継続事業となり昨年で四回を迎えた。

水俣市と聞けば、多くの人が「水俣病の町？」と言う。実のところ私の認識もそうだった。その水俣に初めて訪れたのは二〇〇八年秋、図書館から依頼された講演がきっかけだった。

想像していたのは「海の町」だが、七五パーセントは九州山地の一部である山林が占め、市街地は不知火海に面した一部。全長二二キロメートルの水俣川が中心部を流れているが、この川は水源から河口まで市内で完結している。ひと言でいうなら、水俣市は水俣川がつくった川の町といってもいい。水俣川から分岐した支流が、まるで大木の枝のように広がり、いくつもある水源の水はまことにおいしいのだ。水俣環境ツアーマップというものがあり、その地図に描かれている青く塗られた川の姿をみていると「川の樹」という言葉がぴったりとあてはまる。人びとの暮らしは昔から山、川、街、海、それぞれと深くつながっている。

そのときに案内してもらったのは、市街地から三〇分以上はかかる川の上流の集落だった。そこは市が取り組んでいる「村丸ごと生活博物館」の指定地区。村丸ごとってなに？ 聞き慣れない言葉にとまどいながら、木々に囲まれた廃校になった分校で、村の女性たちが作った家庭料理をいただいた。コンビニも自販機もない水俣のいちばん奥の集落が「丸ごと博物館」のひとつだという。これは二〇〇一年に制定された「水俣市元気村づくり条例」に基づいたもので、村全体を屋根のない生活の博物館にみたてたもの